

学級担任としての教育相談の在り方

— 不登校の事例を通して —

糸満市立西崎中学校教諭 堀 川 恵

目 次

I	テーマ設定の理由	61
II	研究仮説	61
III	研究の全体構想図	62
IV	研究内容	63
	1 不登校生徒の理解	63
	2 再登校を果たすための手だて	64
	3 不登校を未然に防ぐための方策	65
V	事例実践	66
	1 不登校生徒T男の指導	66
	2 事例研究会について	68
	3 授業実践	69
VI	研究の成果と今後の課題	70
	1 成果	70
	2 課題	70

学級担任としての教育相談の在り方

— 不登校の事例を通して —

糸満市立西崎中学校教諭 堀 川 恵

I テーマ設定の理由

教職について10年あまりが経過した。初年のころ生徒だった青年達に会うと「先生よく怒っていたよ。」と言われることが多い。あのころは毎日の授業で「この生徒達はなぜわからないのだろう。」と自問する日が続き、勢い教材研究に追われることが多かった。それだけに翌年ぐらいから「わかりやすくなったよ。」と言われたときは、「好きな専門で生徒に喜んでもらえるなんて」と中学教諭になれた喜びをかみしめることができた。今では生徒の状態を見て、理解しているか判断できるようになり、指導方法を工夫できるようになった。だが中学校の教諭は教科担任の他にもう一つの職務がある。学級担任としての仕事である。学級担任としてどの程度生徒の抱えている問題について「わかって」きたかについてはあまり当初に比べて自信をつけてきたとは言えない。今年度の不登校の小中学生は127,694人にであることが伝えられたが、私も近年そのような不登校の生徒との出会いをもつようになった。

昨年久しぶりに3年生を担当したときに2つのことについて問題があった。一つは不登校生徒の援助をどうするかわからなかったこと。二つ目は「授業へ行き渋る。」などの不適応の生徒に対しての手だてがよくわからなかったことである。私の関わった不登校生徒T男は前年度からの引きこもり生活が長く、登校へのきっかけがなかなかつかめなかった。結局専門機関の手を借り卒業はできたが、私には不満足が残った。それはあと一步というところで学校へ復帰できなかったことと進学への目標を達成できなかったことである。原因は3点ほど考えられる。一つはあまり見通しを立てた関わりはできていなかったことである。回数的にも事務の多忙な時期は家庭訪問もままならず、継続した関わりが不足していた。さらに母親との連携を積極的に行なわなかったことにある。連絡などはできてももっと家庭へ働きかけることにより彼の変容を図ることを考えていなかったことにある。また関係機関に大きく助けられたのだが、その間の学級への働きかけが弱かった。

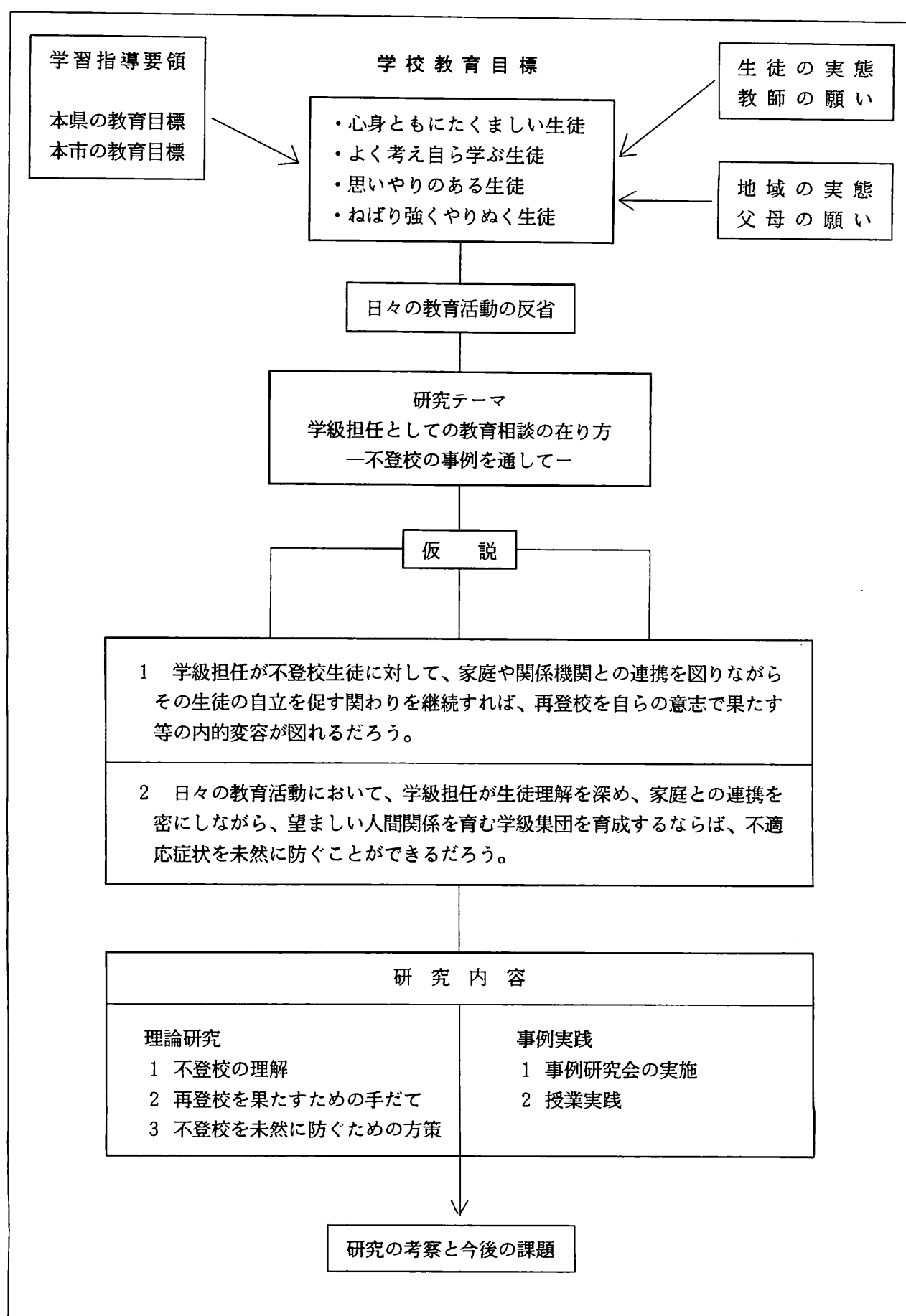
以上の反省から、学級担任が生徒の内的理解に努め、自立を促すような本人への働きかけを継続すれば、不登校生徒を立ち直らせることはできると考えた。そのことは学級内で不適応症状を示す子どもたちにも言える。断続的な欠席や遅刻を繰り返す子どもたちに学級担任として早くからその子との触れ合いを多く持ったり、家庭と連携がうまくできたり、その子を受け入れる望ましい人間関係のある学級集団作りなどを最初の段階から行っていけば、不登校及び不適応の予防は図れるに違いない。本研究では不登校生徒についての校内での事例研究会を持つことや望ましい学級集団作りとして授業実践を行うことにした。T男に対する援助の手だてを他の職員から出してもらうことにより、自分が考えた以上の援助の方法が見つかるだろう。また学級集団への働きかけとして教育相談の手法の一つであるグループ・エンカウンターなどの対人関係演習を取り入れた授業実践が効果的だと考えられる。

そこで不登校生徒をめぐる、学級担任が自立を促すような本人への関わりを継続することによって、望ましい学級担任の在り方を探ろうと思い、本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 学級担任が不登校生徒に対して、家庭や関係機関と連携を図りながら、その生徒に自立を促す関わりを継続すれば、再登校を自らの意志で果たすなどの内的変容が図れるだろう。
- 2 日々の教育活動において、学級担任が生徒理解を深め、家庭との連携を密にしながら、望ましい人間関係を育む学級集団を育成するならば、不適応症状を未然に防ぐことができるだろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 不登校生徒の理解

(1) 不登校生徒の背景

不登校が現代の問題であるという。しかしその原因と手だてについては理解されてはいないと思う。文部省は不登校について「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校したくてもできない状況にあること。(但し、病気や経済的な理由によるものを除く。)」としている。

不登校は多様な背景を伴うが、文部省は以下のような7種類の型を提示している。

① 不登校の背景

区 分	区 分 の 説 明
A 学校生活に起因する型	いやがらせをする生徒の存在や教師との人間関係など、明らかにそれと理解できる学校生活上の原因から登校せず、その原因を除去することが指導の中心と考えられる型
B 遊び・非行型	遊ぶためや非行グループに入ったりして登校しない型
C 無気力型	無気力で何となく登校しない型。登校しないことへの罪悪感が少なく、迎えに行ったり、強く催促したりすると登校するが長続きしない。
D 不安等情緒的混乱型	登校の意志はあるが身体の不調を訴えて登校できない、漠然とした不安を訴えて登校しない等、不安を中心とした情緒的な混乱によって登校しない型
E 意図的な拒否の型	学校に行く意義を認めず、自分の好きな方向を選んで登校しない型
F 複合型	上記の型が複合していていずれが主であるかを決めがたい型
G その他	上記のいずれにも該当しない型

② 考えられること

ここで目新しいのは無気力型と意図的な拒否の型である。

ア 無気力型

学校を休むことにこだわらない無気力型は昭和60年代より増加している。(文部省) 背景として考えられるのは、ささいなことで欠席を繰り返すなどの生活習慣の積み重ねである。

イ 意図的な拒否型

意図的な拒否の裏側には学校を必ずしも必要と求めないなどの価値観の変化が考えられる。学校が生徒達にとって学業以外に何を学べるか保護者にきちんと説明できる必要を感じた。

ウ 遊び・非行型

本県で特徴的なのは夜型社会を背景とした遊び・非行型の型(予備軍)の子どもたちが目につくことだろう。(基本的な生活習慣を身につけさせるなどの)保護者の協力が必要だが、子どもがなかなか親の言うことを聞かない等かなり手を焼いている様子が見受けられる。また放任状態の所も見られ、警察などの関連機関との連携で努力が続けられている。進路を意識するころ立ち直れるものや逆にあきらめて無気力になっていくものも出てくるので学級担任は教科担任等の協力を得ながら学習面や進路指導に力を入れたい。

エ 学校生活起因型

学校生活起因型も41%を占め、(文部省) 学校側に 友人関係を改善したり、職員の共通理解を得る。活躍する場の提供などの努力の必要性が認められる。

2 再登校を果たすための手だて

(1) 自立を促す関わり方

不登校生徒にとって「自立」とはどのようなことを指すか考えてみたい。長い欠席が続くと親も教師も不安になり、「とにかく登校させよう。」という気持ちが先行してしまいがちだが、再登校を果たしたからといって、本人が「主体的に登校したい。」と変わらなければ、また不登校は繰り返される。坂本昇一は「自立」の捉え方を「再登校」とイコールではないとしているが、私も不登校生徒にとって再登校とは「本人が自らの課題を克服し、何らかの成長を遂げた後、結果として、自分の判断で選んだ時初めて意味を為す。」と考えたい。多くの学者が指摘するように、親の手を離れ、友人との関係から理想の自己を見つけることが、思春期の子ども達の課題である。そのためにはそのような機会や環境を用意することが大切だと思う。引きこもりの子が今までの安定を突き破って、新しい環境に踏み込むことができるか、友人の力は大きい。部分的でも本人が望めば、積極的に交流をすすめたい。登校の段階まで致らなくても、本人が社会化していく過程は重要だからである。

具体的にできることは以下の7点である。

- ① 信頼関係を築くことを心がけ数多くの関わりを持つようにする。(本人に会えなくても、プリント類や予定表などのメッセージを添えて届けたり、保護者と話したりする。)
- ② 本人と数多く話したり、遊んだりする事により、好きなことや、挑戦できそうなことを見つける。
- ③ 友人に会いたい気持ちになったら、家に手紙を届けさせるなどできるだけ接触を図るようにする。(登校刺激を与えるのではなく、情報などを教えてあげる。)
- ④ 外へ連れ出すなど、体験を広げられるようにする。
- ⑤ 自分の将来の見通しについて話題にする。
- ⑥ 自分でできることと周囲に手伝ってもらいたいことを決める。(朝起こしてもらいたいかな自分で起きたいか等)
- ⑦ 登校へ気持ちが傾いたら放課後や休日の教室で遊ばせるなどの段階的刺激を試みる。

(2) 家庭や関係機関との連携を図る

子どもが不登校になると親の方も不安になったり、学校への不信感が募ったり、あるいはあきらめて放任状態のところも見受けられたりする。信頼関係を築くことはとても大切だと言える。不登校生徒は親の元で生活の大部分を過ごすので、親のその子に対する接し方の改善の在り様によっては、非常に大きい効果が期待できる。担任としては積極的に家庭との連携を図り、援助の在り方についての共通理解を得たい。判断が難しく指導方針が立てにくいときには専門機関を紹介したり、共に利用しても良いと思う。学校の問題をいつごろ出すべきだとか、どの程度生活をその子にまかせるべきか等の細かい目標を立てて、計画的に進めたい。父親の子どもへの指導も必要とされる場合も多いので、できるだけ「何でも話せるような」信頼関係作りは家庭に対しても要求されたい。

具体的にできることは以下の7点がある。

- ① 家庭に要因が在るのなら、解決へ向けて努力してもらうようにする。
- ② 幼児期などの問題で容易でないと判断される場合には専門家の相談をすすめ、助言をもらう。
- ③ 親には家庭のありかたを指導するのではなくともに協力したいという援助の態度で接する。
- ④ 母親だけでなく父親にも指導してもらうようにする。
- ⑤ 本人がその気になるまで登校をせかさない。
- ⑥ 自分でできることや家の中の仕事をさせるなど「自立」を目指した関わり方を心がける。
- ⑦ 教育センターや児童相談所、適応指導教室などの相談機関を適宜利用し相談する。

(3) 不登校生徒への援助プログラム

多様な要因を有す不登校のすべてに通じる計画的なプログラムを組むのは困難である。ここでは甲斐四郎のモデルを基に長期にわたる無気力型の不登校生徒向けに次の表作成を試みた。

本人の状態	本人への援助	親への援助	学級へ対して	備 考
引きこもりによる 心氣的症状が強い。 ↓ 心氣的症状が弱まる。 ↓ 心氣的症状が消える。 ↓ 活動が活発になる。 ↓ 学校のことを考える。 ↓ 登校を考える。 ↓ 断続的登校 ↓ 登校がスムーズになる。	受容と共感的理解 本人の好きなことを話すなど心理的解放を図る。 生活習慣などは屋型に戻す。 できそうな目標を見つける。 登校の意義を理解させる。 気持ちを語らせる。 自分を見つめさせる。 学校生活上の目標を決める。	激励と連携に努める。 援助の計画を話し合う。 買い物などへ一緒に行く。 家の手伝いをさせる。 子どもの行動を見守る。 学校のことを話題にする。 必要なら学校まで送る。	不登校生徒の理解を求める。 暖かい雰囲気 of 学級集団作りを心がける 級友から手紙などを届ける。 級友交流開始 級友との交流を深める。 放課後の教室で遊ぶ。 勉強などを教えてあげる。 班活動に参加	必要によって専門機関へ援助を求める。 信頼関係を築くこと 必要なら適応指導教室などへの入室を勧める。 入室後も継続して関わる。 登校をせかさない。 他の職員や養護教諭と打ち合わせる。 終始見守り相談の機会を作る。

3 不登校を未然に防ぐための方策

(1) 日々の教育のなかでの生徒理解

早期発見が大事だといわれるが、普段どれくらい生徒一人ひとりを把握しているかが問われる。教育相談の機会を持つことが重要である。定期的な相談や「いつでも、どこでも」できる相談の機会を増やしたい。日常のなかで生徒観察に努め、接する機会を増やすことが重要だと思われる。

具体的にできることは以下の4点である。

- ① 基本的に日常の観察を心がける。学級の人間関係に気をつけて、授業後や清掃時間、休憩等を利用して声かけをするようにする。
- ② 生徒の書いた一日の反省や記録など活用し、メッセージを添える。
- ③ 行事への取り組みなどできるだけ一緒に関わるようにして、活躍できる場を見極めたり、用意したりする。
- ④ 養護教諭や教科担任と話し合うことにより、理解のための情報を得るようにする。

(2) 家庭との連携の在り方

私たちは親となかなか連絡がとれなかったり、迷惑そうな反応をされたりということがあったと連携も取りにくいと感じがちではあるが、生徒にとって最も近い存在である親からの情報が早期発見の

ために重要だと思われるので、保護者会などで確認して起きたい。日頃より欠席などでの家庭へ電話連絡などは大事にし、子どもについての変わった点があれば話し合っておきたい。

具体的にできることを以下にまとめた。

- ① 学期始めの保護者会等で、欠席などの連絡方法や、本人に変わった点が在れば、学校に連絡をすることなどを確認しておく。
 - ② 遅刻が続いたり、学級内で孤立したり、授業において意欲が低下したといったような本人の変化に気がついたら、早めに連絡し家庭での様子を聞く。
 - ③ 学級便りなどで学校での様子を知らせたり、保護者の声を載せるなどの工夫をする。
 - ④ 様子が気になる生徒の家庭に、通常からの家庭訪問を行ってみる。
- (3) 望ましい人間関係を育む学級集団の育成

学級で子ども達が生き生きしていると感じられるのはどんな場面か考えた時、「心の居場所作り」と言われる生徒が学級のなかで心地よいと感じられる人間関係を育成することがここでは鍵となる。担任はお互いの長所を認めあえる暖かい学級作りを目指したい。そのために学級活動や短学活の工夫や開発が求められる。国分康孝の提案に見られる帰りの会においての「今日の反省」の代わりに、お互い長所を言い合う「今日の輝き」を取り入れたり、生徒の「自己肯定感」や「他人への関心」を高めるような心理教育やエンカウンターなどの対人関係ゲームを取り入れることも良いことだと思う。一番心がけたいのはそのような担任の願いを常日頃語り続けることであろうと思う。

具体的にできることを以下のようにまとめた。

- ① 学年の始めにグループ・エンカウンターなどの演習を実施し、学級内全員との「出会い」を経験させる。
- ② 短学活などではお互いの良いところを言えるようにして、暖かい雰囲気を作るように心がける。
- ③ 行事等にはその取り組みによって、人間関係が促進される過程を特に意識して取り組みたい。

V 事例実践

1 不登校生徒T男の指導—学級担任の在り方

T男は私が関わった生徒で前年度から約一年近く不登校を続けていた。病理的なところは見あたらず、いじめなどの原因も本人は否定していた。最初に出会ったときの無表情さが、いかにも久しぶりに他人と接するのだといった感じの引きこもりの長さを感じさせた。その後適応指導教室などの専門機関を経て、再登校を決意するまでの段階まで進んだが、その試みは初日だけで挫折してしまい再び適応指導教室の指導のもとで卒業までの日々を過ごした。当時の私は前段階の見通しなど持たず、表面的な対応で終わってしまった。その反省からどのような手だてが再登校につながるのかを検証したい。

(1) T男の家庭状況

- ① 学年 氏名：中学3年生 T男
- ② 主な欠席状況：小学校時代は年間20日前後。6年生では30日、中学1年生に上がってからも30日記録されている。2年生では連休を境に登校していない。
- ③ 家庭の様子：
母親、姉(高2)と3人暮らし、生活は安定していない。父親とはT男が小2のころより別居している。
- ④ T男の様子：
不登校当初は担任が訪ねても、布団をかぶって応じず昼夜逆転の生活を送り、一日の大半を家の中で過ごしている。担任は友達を呼びに行かせたり、特に親しい友人に電話をしてもらおう等の試みもされたが、T男は誰にも会おとしていない。

(2) 指導の経過：

- ① 一学期
・始業式の前日に母親が来校する。T男の最近の様子を話す。

- ・翌日養護教諭とともに訪問した。T男は出てきて私に会釈をしたが、表情は硬い。
- ・その後は二度程訪問したが日中は寝ていて出てこようとしなかった。
- ・3度目は夜の7時ごろ訪問した。来てもかまわないかと聞くと、うなずいてくれた。
- ・連休前に訪ねる。「何か自分の生活を変えるようなことをやってみないか」と提案してみた。
- ・T男と比較的仲のよかった友達が会いたがっていると伝えたとT男は遊んでもいいと答えた。
- ・友人はT男の変貌ぶりにすっかり驚いたと話していた。夏休みに遊ぶ約束をして友人は別れた。
- ・地域の教育相談員の学校訪問が実施され、T男の家庭訪問をして下さることになった。
- ・終業式後の家庭訪問で「2学期から適応教室に行くことにした。」と話している。

② 2学期

- ・2学期からT男はほとんど休まずに適応指導教室へ通った。
- ・適応指導教室の先生の要請で私は定期テスト類を届けたり時折様子を見に行った。
- ・体育祭の前日友人達にT男に電話するように頼んだ。友人は試みたがT男は断っている。
- ・2学期が終了に近くなり、T男も学校へ戻ることを承諾した。

③ 3学期

- ・3学期の始業式後T男は母親とともに来校し、放課後の教室で友人達と将棋をして遊ぶ。
- ・翌日T男は朝早く登校。この日はテストの日でもあった。T男はどの教科も時間いっぱい取り組んでいた。清掃中も黙々と仕事をしていた。帰りの会が始まるまで翌日に備え問題に取り組んでいた。
- ・翌日母親から欠席届の電話が入る。疲れたので起きられないからという。
訪問時にはT男は元気そうで明日からは学校に行くと答えていた。
- ・その後も2日は欠席は続く。母親は適応教室にもどせないかと私に訴えてきた。
- ・適応指導教室の先生には電話で相談を試みたが、まだ1週間以内だからと難色を示した。
- ・T男は母親に適応指導教室なら行きたいきたいと話し、翌週再入室の手続きをとる。
- ・その後卒業まで、適応指導教室で過ごしながらか受験の準備を進める。
- ・入試二日目の試験は起きられないという理由で欠席する。

(3) T男への援助についての考察

① 本人との関わりについて

指導の継続という意味では十分とは言えず、特に専門機関にゆだねてからは、消極的な関わり方が多く本人と直接話す機会が乏しかった。

② 家庭との連携について

母親に対して様子を聞いたり、連絡をしたり、適応指導教室の入室を勧めたりといった手続きなどは進めたが、生育歴や家庭環境について深く尋ねたり、養育態度を改善しようとする働きかけはしなかった。母親は最後までT男の言うがままにしようとする傾向が見られた。

③ 専門機関との関わりについて

市の相談員や適応指導教室の先生の対応は迅速で積極的であり、私への連絡も数多くあり様子を知らせてくれたが、入室機関中、学級の様子を知らせたり、休日に遊びに来させるなどの担任の学級へなじませるための段階的な働きかけが弱かった。

④ 学級との関わりについて

友人たちはT男との交流を開始したが、適応教室入室中は遊びにも行かなくなり、T男は適応指導教室の友人とばかり遊ぶようになった。このことが再登校に結びつく手だてを失わせることになった。クラス内では長期の休みを続けるT男にどんな子だろうという好奇の感情は感じられたが、暖かく迎えてあげようという雰囲気はつくることができなかった。

一日だけの再登校した日、本人の意志で学級で過ごすことにしたが、まだクラスになじむ段階ではなかった。別室登校が適当と思われた。やはりステップを踏まない再登校には無理が感じられた。

⑤ 自立を目指すということについて

本人の変容は専門機関の力が大きい。生活リズムを立て直し体験を広げ、友人と遊び、進路に向かって努力を始めることができた。だが最終的な自立は本人はできなかった。高校入試を欠席したことは、やはり新しい環境に入ることができる段階まで達成していないことを意味している。学級にもどることはその結果から見ても重要だったと言える。

2 事例研究会について

現場の職員の知恵や経験からの助言は文献から得られる以上の実践的な方法が得られるであろうと考え、T男を対象とした校内事例研究会を実施した。その際校内研究会としてだれでも参加可能で広く意見の得られるA方式を採用した。

一般的に事例研究の目的、効果には以下のような点が挙げられている。

- ① 生徒への指導の幅を広げる。
- ② 教師同士の連帯を強める。
- ③ 教師の生徒理解の目を養う。
- ④ 一般の先生達の教育相談への関心を強める。

(1) 事例研究会の実施『インシデントプロセス』を基本としたA方式による事例研究会（埼玉県立南教育センターが開発）

- ① 目的：対象となっている子どもや家庭が抱えている問題点を参加者が多様な角度から情報を収集したうえで検討し、その子や周囲のものに対する指導や援助の具体的立案する。
- ② 日時：6月29日（火） 午後 2時30分～4時
- ③ 場所：西崎中学校 被服室
- ④ 研究会の進め方
 - ・進め方の説明 目的、時間配分、進め方の説明、記録用紙を配布する。（5分）
 - ・情報の収集 本人及び問題行動理解のために参加者は事例提供者に質問（20分）
 - ・個人研究 個人で解決すべき問題点と対策
 - ・グループ研究 グループとしての指導法を立案する。（25分）
 - ・全体研究 各グループから発表する。（15分）
 - ・事例提供者 実際に実施した指導方法とその結果を説明する（5分）
 の結果説明 事例報告者がどのような意志決定をし、対処したかを聞く。
 - ・参加者の
 自己評価 参加者はその方法と各自・各班の方法とを比較検討する。
 - ・指導助言 研究方法に関する内容、事例に直接関係する内容、一般的な内容について行う

⑤ 事例の概要 一省略

⑥ 質疑応答の記録一省略

(2) グループ研究のまとめ（抜粋）

対 象	問 題 点	指導と援助の手立て
本 人	性格的問題点 直接的原因がわからない 友人の影響の問題	カウンセラーなどへ 原因を探る 友人へ理由を説明し応援してもらう。
家 庭	母親の本人への関わり 保護者との会話	しっかり関わってあげる。 本人との会話を多くする。
その他	指導方針の確認 基本的生活習慣の問題	学年でのサポート 基本的生活習慣をしっかりさせる。

(3) 事例提供者からの報告—省略

(4) 指導者の助言

一緒に考えたいのは何の為に事例研究会をもつのかということ。子どもの見方はいろいろあるのでみんなでみようということで、埼玉県から事例研究会を対象にした研究がスタートした。A（学校生活に起因する場合）とB（遊び・非行型）は消極的生徒指導とよばれ、今お互いが手を焼いているものである。C（無気力型）は放っておくとA・Bのタイプになりやすい。夜型の生活になることも一因である。D（情緒不安型）は適応指導教室の対象になる子どもたちである。職員の組織の中でA・Bは対応していくことが望まれ、無気力型は放っておくとA・Bに走るのので注意が必要である。心因性に関しては、判断が難しいので、病院などの機関との連携が必要になってくるが、人権などの問題が問われることもあるので、慎重に対応しなければならない。事例研究会は2～3名でもできるので一人で悩まず、早めにまた多く持ってもらいたい。また最近ではEの（意図的拒否型）それも親の意志を伴ったものが見られるようになってきた。学校を拒否し大検の準備などをさせる家庭が沖縄でも新たな問題になっている。

(5) T男を対象とした事例研究会の考察

今回の事例研究会で多く聞かれた意見は要因やT男に関する情報が少ないということであった。養育歴や父親との関わりや、部活動の顧問との関わりなどを質問されたが、答えに窮してしまい、このようなことを以前から知っておくべきだったのだということが理解できた。不登校の要因が早めにつかめたらそれに見合った援助の計画も立てられたと思う。そのためには本人や保護者との関わりを深めることが不可欠だと認識させられた。このような新たな視点に気がつかせられたという点においては事例研究会の意義は大きい。

(6) 参加者の感想（抜粋）

① 要因や問題点は適格に把握されたと思いますか？

- ・要因などがはっきりしないので、もっと情報が必要であると感じた。
- ・個人の情報量は不十分であるにも関わらず、みんなの知恵を出しあうと以外と問題点が見えてくるものだと感じた。

② 生徒理解は深まりましたか？

- ・良い機会になった。こういうチャンスを多く持って、いろいろな事例研究を要望したい。
- ・深まったというよりは見方が広がった。
- ・生徒理解をしようという姿勢が深まった。

③ 指導方法や援助の手だてはどの程度確率されたと思いますか？

- ・もう少し情報量があれば良かった。要因がはっきりしないので一般論的な解決方法になりがちである。
- ・過去の事例ではあったが今後も同様なケースは出てくると思う。今日の事例研究で出たものを参考にしたい。

3 授業実践—グループ・エンカウターの導入

予防的教育相談の手法として対人関係心理ゲームの導入が提案されている。これを道徳などで実践しても良いし学級活動でも可能だと思う。今回は英語の授業に取り入れてみることにした。

(1) encounterを使った指導案

- ① 日時 7月17日（土）4校時
- ② 対象 西崎中学校 1年4組
- ③ ねらい

ア エンカウターとは出会いという意味で人間関係作りを目的とするexerciseである。コミュニケーション活動を主体とした外国語の学習の目的のもかなうものと考え導入した。

イ 英語学習としては挨拶の仕方に慣れることと、“Are you?”の文型を実際場面で活用できることを目的としている。

④ 本時

生徒の活動	教師の活動	備考
• Warm-up(10分) 音楽をかける間部屋を歩き何人の人にあいさつを言えるか練習する。 • Blind date (25分) カードに自分の外見の特徴と、性格、自己紹介を書く。 - 男子は女子の女子は男子の書かれている人を探す。 • Sharing(15分) 感想を書いて何名か発表する。	本時の活動について説明する。 起立させて、動くように指示する。 着席させて机間指導を行う カードを集めて男女で交代して配る。 “Are you Mary?”のように英語で聞くように指示する。 着席させて静かに聞くように指示する。	“Hi,——” と first nameをつけて 自分の名前を使わないように注意

⑤ 授業についての考察

内容が十分理解されないと生徒は混乱するようであった。またかなり騒がしくなるので場所も考えたほうが良いが、何回か導入したら、スムーズに進めるような感じを受けた。途中の自己紹介を書く作業は完成までに個人差が見られるので、事前にできたら良かったと思う。感想を発表する時間はなかったので、書いてもらいながら私がみんなの自己紹介カードを読んだら熱心に聞いていた。授業後の感想は25名が楽しかったと答えているが、人数が多くて何だか疲れたというのも3名ほどいて、おもしろくないと答えた生徒が2名、中学生なのに子どもっぽいと答えたのもいた。生徒はこのようなexerciseには慣れていないという印象が強かった。1回の導入で子ども達の人間関係が促進されたとは言えない。年間を通じて行えば効果もあがると感じた。日々わずかな時間で行えるので学級活動などで導入してみたい。

VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 定義や文献等により不登校生徒への認識を深めることができた。
- (2) 事例研究会により対応策として学級担任が不登校生徒に対して、その要因を探り、理解に努め、変容を図る関わりと環境を変える努力が大事だということが理解できた。
- (3) 家庭や校内、関係機関との連携が大事だということが理解できた。
- (4) 不登校生徒に対する関わり方はどの生徒にも適用できることが理解できた。
- (5) エンカウンターの実践を通して人間関係を促進するための手法を理解する事ができた。

2 課題

- (1) 多忙な日常の教育活動のなかで、生徒との関わりをどのように深めていくか考えること。
- (2) 学級担任としては、学級経営に人間関係作りをどう開発していくか考えることが必要である。
- (3) 保護者との連携を図ることや教育相談担当者や養護教諭との日常的な事例研究会をどのように設定するか。

<主な参校文献>

甲斐志朗	『だれもが身につけたい生徒指導・学校教育相談の技法』	ぎょうせい	1993年
埼玉県教育研究所連絡協議会	『教育相談のための資料集11』		1994年
坂本昇一	『総合教育技術 2月号増刊』	小学館	1994年
国分康孝	『学級担任のための育てるカウンセリング』	図書文化	1998年